エーネジデムス(部分訳) G·E·シュルツェ

栗原

隆・平

Ш

愛

訳

Gottlob Ernst Schulze

AENESIDEMUS (1792)

AETAS KANTIANA IMPRESSION ANASTALTIQUE CULTURE ET CIVILISATION

übersetzt von KURIHARA Takashi und HIRAKAWA Ai

エーネジデムス(部分訳)

(130

ヒュームの懐疑論は理性批判によって実際に論駁されたか?

にかかっているのである。さらに、必然的な総合判断をカントが人間の心情の本質的な規定から導出することは、 にかつはっきりしていると見なすことができたほどのものであったかどうか?〉ということを我々が探究すること 式を構成しているということのために、カント氏が持ち出している根拠が果たして、デヴィット・ヒュームも十分 まわち、〈必然的で総合的な判断が心情や表象の内的な源泉そのものに起因しているに違いなく、経験的認識の形 しがた樹てられた問いに答えるにあたっては、まったくもって、次のことにかかっているということになろう。す できるということについてのヒュームの疑いは、根拠のないものであったということになろう。であるからして今 局のところ、実際には論駁されていたことになろう。そしてそうであるならば、原因と結果の概念を事柄へと適用 ら、批判哲学の体系は揺るぎなく確固としたものであっただろう。そうであったなら、デヴィッド・ヒュームは結 る。この導出や規定が一切の疑いを免れるものであって、決定的で確実な原理によって基礎付けられているとした から導出するうちに、そして必然的で総合的な判断と経験的な対象の認識との関連を規定するうちに含まれてい カントの体系にとっての独自(eigenthümlich)な学説や命題の主たる支えは、必然的な総合判断を【131】心情

そしてこの判断の価値を規定することは、そもそも、果たして、根拠のある合理的な反論にさらされないのか、 いうことを我々が探究することにかかっているのである。 ع

きない構成要素となっているということは否定しがたい事実であり、それ自体、疑われるべくもない。また【132】 さて、人間の認識のうちに必然的な総合判断があるということ、必然的な総合判断は人間の認識の欠くことので

覚したからといっても、納得することはできないのである。 が帰されることを、純然たる経験に基づいても、あるいは我々の内部に確実で総合的な判断が現存在することを知 付けなければならないというわけでもない。そして我々は、我々の認識においては、確実で総合的な判断に必然性 この判断における述語と主語との結合に帰される必然性は、心情のうちに、結び付きがあるということから導出さ 回ないしは何回か、ある表象を相互に結び付けたからといって、我々が、それらを、いつでも必然的に相互に結び れるのでなく、また、まさしく結び付きがしばしばあるということから導出されるものでもなく、言い換えれば、 定数の経験の調和から導出され得るものでもないということもまた、少なからず確実である。つまり、我々が一

てについて、実在的な根拠も、それとは実際には違う原因も客観的に現存しているとともに、充足理由律というも た判断の根拠だと考えることができるということに基づいて、心情は実際のところ、必然的で総合的な判断の根拠 根拠もしくは起源だと称している限りにおいて、そして純粋理性批判において、私たちが表象の能力だけをこうし のもまた、単に表象やその主観的な結び付きについてのみ妥当するのではなく、事柄自体やその客観的な連関につ でもあると結論付けられる限りにおいて、既に、一つには、我々の認識のうちに【133】現存しているもののすべ |純粋理性批判|| においては、それが人間の心情の根源的な規定を、我々の認識における必然的で総合的な判断の しかし、こうしたことが本当であることを否定できないにせよ、それでも私は次のように主張したい。すなわち、

題を、『純粋理性批判』は、既に確実で決まりきったことだと前提することによって行なおうとした、ということ 来的に反駁するに当たって、ヒュームが自らの懐疑的な疑いをすべてその信頼性に対して向けていたところの諸命 きったこととして前提されていると、私は主張する。そして、それだからこそ、理性批判はヒュームの懐疑論を本 あるそのものの客観的な性質へと当然のことのように推論してしまうことが、既に議論の余地なく確実で決まり いても妥当するということ、また一つには、我々は、我々の表象における何らかのものの性質から、我々の外部に

を主張するものである。

に基づいて提示するか、あるいは、因果関係についての我々の【134】表象を用いることの不確実性についての によってである。すなわち、因果の結び付きの概念や原則についての彼の主張の反対を疑いようのない確実な命題 切なのである。 なりとも決まりきったものだとされない限りで、その限りでそれらの命題は、哲学体系の基礎付けのためには不適 があることについてのその言表を、まさしくひとえに、ヒュームが不確実だとあるいは欺瞞的だと見なした命題に 比較することだけである。つまりヒュームが論駁されるはずだと言うのなら、それが生じうるのはただ、次のこと よって論証している。そして、それらの中に登場する主語と述語との結びつきの正当性が疑われうる限りで、些か いずれも、『純粋理性批判』においてはなされていない。むしろ、『純粋理性批判』は、人間の認識の起源には違い ヒュームの主張には矛盾や不合理性があることを明らかにすることによるかのどちらかである。しかしながらその いる新たな哲学体系を基礎付ける最高の命題を、ヒュームが疑って不確実なものだと言明したものと、非党派的に この結論の正当性を把握するために許されているのはただ、それによって理性批判が、そこにおいて樹てられて

「こうした議論全体や、その議論に付きまとうであろうものはすべて、批判哲学の本質的な意図を見誤った人だ

者たちに対して、世界知における彼らの根本命題の確実性を顧慮しつつ要求した全体を顧みなければならない。し て、これをもって、因果性の根本命題の使用についてのヒュームの疑いであれ、完全に反駁されているのである。 てはならない。ヒュームの要求の全体は、理性批判において、見事にそして極めて完全に実現されているのであっ かしながら、ヒュームの疑いということで、因果性の概念や根本命題を用いることを顧慮するところに立ちどまっ の疑いの解決をめぐって理性批判が果たした功績を正しく判断しようとするなら、デヴィット・ヒュームが哲学

けを騙すことができるだろうという反論を、批判哲学の多くの追従者たちがすぐに言うのが私には聞こえる。ヒュ

どうしてア・プリオリに導入されなければならないのか、全く顧みられていない。ここからヒュームが結論づける らといって、何か他のものがどうして必然的に存在しなければならないのか、それゆえそうした結び付きの概念が らといって考えることは、理性にとってはまったく不可能である、と。しかしながら、何らかのものが存在するか 次のことを証明している、すなわち、ア・プリオリに概念に基づいてそうした結び付きを、必然性を含んでいるか く、そうした概念をその奥懐において産出したと申し立てるような理性に対して、いかなる権利をもってそんなこ 理性の概念であって、すなわち原因と結果の結び付きの概念(それゆえ、力と行為などのその下位概念)でしかな のは、理性はこの概念でもって徹頭徹尾騙されているのであって、理性はそうした概念を誤って自分自身の子ども り得る、なぜなら、このことが原因の概念を語っているから、などということを、である。ヒュームは無矛盾的に ような時には、それによって何か他のものも必然的に措定されなければならないような、そういう性質の何かがあ とを考えているのかという釈明や答弁をヒュームに与えることを要求したのである。すなわち、何かが措定される 【135】つまりヒュームが、彼の懐疑論において出発点としているのは、ただ唯一の、とはいえ極めて重要な理論

の前に置いたのであって、だけどその概念は、経験を通して孕んだ構想力の雑種でしかなく、そうした構想力はあ

的な必然性の前へ洞察に基づいて押し付けている、ということであった。」 る種の表象を連合の法則のもとにもたらしたのであって、そこから生じた主観的な必然性を、すなわち習慣を客観

らの概念は、経験に起因するのではなく、純粋な悟性に由来しているというのである。」 たのであった。理性批判は、さらに、あらゆるこうした概念の完全な演繹を、行なって、その演繹によると、それ は、それによって悟性がア・プリオリに諸事物の結び付きを考える唯一のものでは決してない、ということを示し 【136】「さて理性批判は、差し当たり、ヒュームの異議申し立てを一般的に考えて、原因と結果の結合の概念

ことは、とりわけ理性批判も、独断的な哲学が物自体を知ることを要求して証明してもできないことに基づいて示 その判断のうちに含まれている諸概念が可能な経験の対象へと適用される場合にのみ達成され得るであろうという うこと、そして、先の〔純粋な悟性に由来する〕概念や根本命題がア・プリオリな認識として我々の内で現存して したのであった」。 の諸形式しか含まない、ということである。しかしながら実際は、本当の認識はただ、ア・プリオリな総合判断や、 必然性や普遍性に基づいて、矛盾なく証明しているのは、先の諸概念の原因が人間の心情のうちに求められるとい いるがゆえに、表象している主体においては、その力のあらゆる現実的な発露に先立っているところの感性や判断 理性批判が、言うなれば先の〔純粋な悟性に由来する〕諸概念やそれらに関連している根本命題が帯びている

らゆる我々の洞察がそこから成立する構成要素の起源に言及した」というわけである。 されたのであった。これによって、理性批判は、同時に人間にとって可能な認識の全範囲をも正確に測定して、あ のようにして我々のもとにあって、そしてどのようにして感性的な知覚に正しく適用され得るのかということが示 「こうやって理性批判によってヒュームの懐疑論は、完全に反駁され、【137】ア・プリオリな総合的な認識がど

証明されたり、およそ一般的に決められたりというわけではない。

の所産として重要であるかもしれないが、だからといって、これによってデヴィッド・ヒュームに対抗して何かが

しかし、総合的必然的な命題の可能性について理性批判において与えられている説明もまた、機知や哲学的精神

由来してくる特殊な原因が存在しているのかという問いを、理性批判は既に決まったことで決まりきったことだと 因果律によって相互に結び付けられているのかという問いを、さらにそこから我々の判断がそれらの規定を伴って くなってしまう。従って理性批判は、次のような理論哲学の重要な問題を解決したという。その問題とはすなわち、 提なしでは、理性批判において必然的な総合判断の起源について言われていることのすべてが、全く意味を持たな るところの一つの実在根拠を持っている、ということを決まりきったこととして前提している。そしてこうした前 認識の形式を決めるだけであって、経験的な知覚へと適用されて初めて、一つの意義を持つのだ、と。それゆえカ るという状況に基づいて、カントは、次のように推論したからである。すなわち、この判断はただ、【138】経験の 考えたのである。なぜなら、必然的で総合的な判断が心情からそして表象の内的な起源から生じて対象へと関連す の包摂に従って、心情を必然的で総合的な命題の現実的な原因として想定し、そう称したのである。これによって 種の判断へと適用することによってのみ可能にした。そしてこの判断を、何らかの結果の概念の下へ包摂して、こ 普遍的な問題への自らの答えを、理性批判の著者が、因果性の根本命題を経験に従って我々のうちに現存するある いかにして必然的で総合的な判断が我々において可能になるのか?という問題である。その際に、現実的なものが ントは、人間の認識のどのような部分であっても、これによってその認識のいかなる部分であろうと引き起こされ カントは、同時に我々の認識におけるこの判断の本当の使命と価値とが、決まりきった形で決められるであろうと 明らかに、つまり『純粋理性批判』の著者は、いかにして必然的で総合的な命題は我々のうちで可能か、

殊な原因の結果であるということが既に決まりきったことでなければならないからである。 なぜなら、我々の認識の起源にして原因は何か?」と正当にも問うことができる前に、既にどんな現実的なものに したり、それについて何らかのことを取り決めようとしても、無駄であるし、目的を欠いたものになるであろう。 ことでない限り、その限りで、果たしてこの概念や根本命題がもっぱら何らかの主観的なものを構成するか、 答えを要求したことであろう。【139】カントなら正しく、きっとこう応えたであろう。因果性の概念や根本命題に た原因(これはお望みの何でも構わない)の結果だとしてみなすようなことになったのか、ということへの論議と 体系を組み立て始める際に直ちに、必然的で総合的な命題の出来事すなわち現存在を我々のうちで、それとは異なっ 粋理性批判』の著者について、次の論件についての論議と答えを与えるようにと要求したことであろう。すなわち、 ついても根拠と原因とが実在しているということ、そしてとりわけ、我々の認識はその規定のすべてからして、特 ついてどのような使用法がなされるべきか、それらについてはどのような事情にあるのか、不確かで決まりきった して前提して、この前提に従って、必然的な総合命題の起源を探索したのであった。従ってヒュームならば、 いは現実的なものの客観的な述語であるのか疑わしいし、その限りで、人間の認識のさまざまな部分の起源を探究 体どのような権利をもって批判哲学を基礎付ける際に、因果律を適用したのか、いかにして、批判哲学は自らの だが、我々が想定しようとしているのは、一つには、すべての現実的なものが因果性によって実際にも結び付け ある

批判が我々のうちにこうした必然的で総合的な判断が現在することを認識したところから、その原因と起源の洞察 を通して理性批判が、心情は必然的で総合的な判断の原因であることを提示した推論、そして、それを通して理性 られているということ、一つには、悟性は、我々の認識に際して、その生成と規定の根拠を問う資格が与えられて いるということであり、こうしたことがそれ自体として確実で疑い得ないということである。そうしてこそ、

的にも果たして証明しているのか、ということを研究してゆこう。この推論は以下のようになっている。 へと高めていった推論が、果たして正しいものなのか、そして何かを【140】ヒュームに対抗してだけでなく一般

唯一の方法で我々によって可能だと表象されるものは、ただ、この唯一の方法でしか可能ではあり得ない。

gsweise)から起因するものとして見ることを通してのみである。 象される。すなわち、我々がその表象を心情から、そしてそのア・プリオリに規定された行動様式(Handlun 我々の認識における必然的で総合的な判断はただ次のことを通してのみ、我々にとって可能なものとして表

そこで、我々の認識の内なる必然的で総合的な判断も、ただ、心情からそしてそのア・プリオリに規定され た行動様式からのみ現実に起因することができている。

性をヒュームが疑ったものである。このことをヒュームは詭弁(Sophistikation)だと説明している。なぜなら、 であって、なぜなら、他のようには考えられないからである。しかしながら、まさしくこうした結論も、その正当 いる。あるいは、 我々のうちの表象や思想の性質から、我々の表象の外部に現存しているものの客観的で実在的な性質へと推論して らの判断が現実的にもかつ実在的にも、心情から起因するに違いない、ということである。だからこそ理性批判は、 それだから、そこから理性批判が証明するのは、我々が、我々の認識における必然的で総合的な諸判断の可能性 我々がそれらの判断を、心情から導出するのとは別なような形では、表象したり考えたりできない以上、それ 理性批判が証明しているのは、何らかのものが実はかくかくの性質であるに違いないということ

想のうちにあるものが、その思想の外部にあるものと関連しているのか、ということを規定することのできる原理 どの程度、【141】我々の表象とその徴標とが客観的なものやその徴標と合致するのか、そしてどの程度、我々の思

我々は知らないからである。こうした推論は、すべての独断論が立脚する基礎でもある。そのような基礎はか

る。 ことはなおいっそう困難である。なぜなら、理性批判は、表象と、表象から独立して現前しているはずの事柄との だろう。すなわち、 ばならなかったというのは、 られうるためには、 しようとする推論の小前提は、さらにその大前提と同様に誤っている。そして、この判断が可能なものとして考え して、我々の外部に見いだされるものの規定へと推論が行なわれることはできない、ということによってである。 すなわち、体系の基礎付けが前提された場合には、通常はそうでさえあっても、我々の表象や思索の規定から、決 を、つまり、 に一切の説得力のある力や確実性を喪ってしまうに違いないのだが)、しかも、その体系の最も重要な部分の一つ 間に存在している区別を、かくもしばしば、かくも強調して諄々と説き聞かせ、(それによって先の推 性批判が応用した論証は、我々を、物自体の果てしない領域において最も重要な発見へと導くことができたのであ 導くと説明した推論を用いて、そして、我々人間が物自体について何も知らないということを証明するために、 基礎付けられてきた。それゆえ理性批判は、ヒュームに反論するために、ヒュームが徹底的に欺瞞的だと、誤謬に おいて用いられてきた。そのような応用によって、その結論に自己矛盾するような理論的な世界知の体系はすべて、 ねてより、我々の表象の外部に現前しているものの客観的な本性や、実在的に真なるもの規定するために、哲学に 必然的で総合的な判断が心情に起因していて、ア・プリオリに我々のうちにあるということを、 しかし、理性批判がその体系の基礎付けにあたって、いかにこうした推論を用いることができたかを把握する 超越論的弁証論を基礎付けるにあたって、とりわけ【142】次のことによって行なったからである。 人間の悟性がその文化の今日の段階にあっては、唯一の仕方で、 ア・プリオリに現存しているものとして、そして心情に起因するものとして、考えられなけれ 徹底的に間違っている。そもそも、そこから理解されるのは次のようなことであった 何らかの可能性を表象するこ 理性批判が証明 論は必然的

とができるであろうが、だからといって、

いつの時代でも人間悟性は、大いなる成熟に与っているからということ

25

きよう。つまり、こう考えることができるのである。すなわち、我々の認識はすべて、【143】実際に現前している 普遍妥当性とが現存し得るように、理性批判で生じたのとは別の仕方で分からせる可能性も残されている。そして 持って些かなりとも確実に帰結しなかっただろう。しかしながら、我々の認識の確実な部分では、必然性と厳密な 確実で総合的な判断に付きまとう必然性については、理性批判で言及されたのとはまた別の根拠を考えることがで

で、この何らかのものの可能性を、この唯一の仕方でのみ、考えることができるであろう、ということには、

外部の事物が触発するような、そして我々の心情において認識を引き起こすような特殊な仕方と様式によって、 らではなく、偶然的で変化する判断を批判哲学によれば我々のうちにもたらすところの、同じ対象から由来する、 み出されるのだ、と。そして、それゆえに、必然的で総合的な判断は、それらの中で現れる表象ともども、

対象が我々の心情に与える影響から生じ、こうした認識の確実な部分に当てはまる必然性でさえも、

我々の心情の

形で、ア・プリオリに、そして心情に基づいて告知しているというのは正しくない。たとえば、外的感覚を実際に (a)理性批判で想定されているように、ある総合命題に伴う必然性の意識は、その起源を間違いない

その場を占めたのだとかと、考えることもできよう。しかしながら、【144】我々は、他の感覚を実際に持つことは できない。あるいは、先の感覚をすっかり全くなくしてしまうこともできない。むしろ、その現在の現存在を、何 に違いない。我々はそれを、なるほど、感覚が現に存在しなかったとか、感覚が現存在している間に、別の感覚が の意識である。感覚が我々のうちに現在しているにもかかわらず、我々はそれを現前しているものとして認識する るはずなのだが、そうした感覚が経験的な起源を有するにもかかわらず、それに結び付けられているのは、必然性 感覚することは批判哲学に従っても、その素材に関して、すべて心情からではなく、我々の外部の事物から由来す

全く

におけるどのような規定が、心情に対する物自体の影響によってもたらされ得るのか、どのような規定がもたらさ できない。(b) 理性批判が主張しているように、物自体が我々にとって完全に知られないままなら、我々の心情 認識に当てはまる必然性が、認識のア・プリオリな起源を、より確実で間違いなく告知しているなどと言うことは 不可能でないというのなら、次のこともまた可能であろう。すなわち、経験的な対象が我々のうちに認識をもたら それによって必然性の感情が一定時間【145】を通して、我々のうちに活性化されるやり方で、触発されることが と結びつけられている必然性の意識が現われる。しかし、一般的に理解されるなら、我々の心情を経験的な対象が、 的な判断においては、常にどんな場合でも、それらの判断が我々のうちに現存しているのなら、 ある。つまり、前者は、一定の期間持続して、単にある状況の下でしか現存しないものである。これに対して総合 覚や内的で現実的な感覚に伴う必然性と、確実で総合的な判断において現出する必然性との間には、重大な違いが 心情に対するその影響を通して、その場合において必然性の意識を惹起して、何らかのものが今、知覚されている らない。そして、我々が見られている木の枝を、それらがかつて我々の心情にとって現在していた配置において、 それらがかつて存在していたように配置(Anordnung)したり、結びつけたりすることを、我々がしなくてはな らかの必然的なものとして意識しているのである。同様に、外的な対象の現実の感覚において顕わされる徴標を、 れ得ないのかを、我々はまったく知ることはできない。なぜなら、我々にとって完全に知られない物は、それが引 し、それらの結び付きがいつでも常に、必然性の意識によって伴われるということである。そうなると少なくとも、 のとは別のやり方で知覚されることをその対象が不可能にする、そうした場合である。さて、なるほど、外的な感 知覚するのは必然的なのである。それゆえここで、実際に次のような場合がある。すなわち、我々の外部の対象が、 性質が主語・主観

き起こし得るものや、引き起こし得ないものすべてに関しても、我々には知られないものである。それゆえ、客観

27

ことは、理性批判が全面的に責めを負うべきことなのである。 部の対象に基づくよりも心情に基づいて分からせるのである。しかしながら、心情に即してそうした特性を樹てる は欠けている一つの特性を知らなければならない。そしてその特性は、必然的で総合的な判断の起源を、我々の外 りも心情から導出される方が分かり易いということなら、我々は、少なくとも心情に即して、我々の外部の対象に 行動様式から導出されるということによって生じるのは、他ならぬ、一方が分からないからといってもう一つの分 全には知られない以上、【146】我々の認識における必然的な命題が、我々の外部の対象からではなく、心情やその 理性批判も認めているように、心情が我々にとって、即自的に存在しているであろうようなものという点では、完 かり難さで置き換えるということでしかない。そして、必然的で総合的な判断の起源は、我々の外部の対象からよ

から、そしてその影響様式から導出することと比べて、些かなりとも分かり易いというわけではない。なぜなら、 心情から導出することは、そうしたものの(つまり認識における必然的なものの)現存在を、我々の外部の諸対象 ことは、どこから必当然的に確実だというのか? (c)我々の認識における必然的なものや普遍妥当的なものを 的で我々に完全に知られていない感覚の対象が、必然性の現われるような認識を生み出すことができない、という

ちの独断論を水泡に帰するための試みでしかなかった。ヒューム自身は、そうした試みを余り尊重していなかった 習慣や、ヒュームの樹てた観念連合(Ideenassociation)の法則に基づいて導出することは、彼の時代の哲学者た それらの相互関係が必然性を包括しているがゆえに、経験から生じるわけがない、ということである。この概念を のの起源についての理性批判の主張に対抗して異論を差し挟んだような何らかのものとして、果たして見ることが ようである。それゆえ、述べられてきたことを、ヒュームが、 人間の認識における必然的なものと普遍妥当的なも

「しかしヒュームは、次の点で理性批判と実際のところ完全に一致している。すなわち、原因と結果の概念は、

果が外に残されていることも考えられると、さらには、そこで経験が、かの哲学者たちがそこで見いだすと憶測 果を必然的とする力(Kraft)が働いていることを反論を許さぬ形で証明したと、そして多くの経験の一致におい 心情から導出することの正当性を、その導出は証明されていないし、 その時ヒュームにとってはこういうことだったのだ。つまり、結果の必然性を見いだそうとしていた変化の交替に だなどと教えはしない、むしろ教えるのはただ、これこれの性質である、ということだと、ヒュームは語っている。 する対象が心情に対する影響から由来し得る、ということを否定する。それゆえ、経験は、 知識の全体に必然的な命題も帰属することを容認する。しかし理性批判は、この命題が経験から、すなわち、 ていたものを本来包括していないと、ヒュームは考えたのも正しい。(*)【148】これに対して理性批判は、 るのは正しい。すなわち、こうした一致と斉一性にもかかわらず、ひとたび、いわゆる原因が措定された後で、結 の交替が一致していて斉一であるからといって、結果の必然性を含意するものではない、とヒュームが想起してい て、原因と結果の相互関係に帰属する必然性についての我々の表象の根拠と起源とが含まれているのだと、言って 同時代の哲学者たち、それも、自然が変化しながらも斉一であるということは、現前する対象において、特定の結 批判がまさしく主張していたことを同じような観点から、主張したのでも決してない。ヒュームは、つまり、 したのであろう。ヒュームは、経験が我々に、必然的であるものについて教えてくれることはあり得ないと、 できるだろうか?」【147】その限りでヒュームは確かに、理性批判において樹てられた、必然的で総合的な判断を いた哲学者たちに対抗して、〔理性批判と同じような〕先の主張を用いたのであった。これに対して、一定の変化 本来はいかなる必然性も包括されていない、そして、それだから必然性の概念は、一致している知覚の 証明されえないものだとして、論駁しようと 何らかのものが必然的

かなる構成要素をも決めはしないので、知覚からは成立し得ない、ということである。しかしながら理性批判がま

るはずのものについて、カントにあっては、我々の認識の中に現前しているものの起源について、語られたのであ のをも生み出すことなどできない、ということである。ヒュームにあっては、それゆえ、経験において現存してい 内なる偶然的な認識を引き起こすような対象だからといって、我々の認識における必然的なものや普遍妥当的なも

さにこうしたことを言う場合は、次のような意味なのである。すなわち、心情に対するその活動性を通して我々の

- (*)『人間知性論』第四試論を参照
- (┅)紛れもなく、必然的で総合的な命題の可能性についての論証は、最も重要で【149】最も強い議論であっ 想起されてきたように、誤った前提から存立しているか、あるいは不当な推論から存立しているかのどち 断がそのために証明し得るより僅かしか証明していない。むしろ、しばしば批判哲学の論敵たちによって は、あらゆる経験に先立つある表象の先行性のために何かを証明するにあたっては、必然的で総合的な判 と純粋な時間の現存在のために、なおも申し立てられている根拠のことである。そしてそれらの弱い根拠 に関わりあうことはしない。これらの根拠は、超越論的感性論において、我々の認識における純粋な空間 で、我々は、その結論の最高の根拠を検討する中で、なるほど、また別の非常に弱い根拠を検証すること 的な対象が我々の心情に及ぼした印象のすべてから独立していることのために申し立てた議論であったの て、それは、理性批判が我々の表象のある構成要素について、一切の経験から独立しているとともに、外

してそのア・プリオリに規定された行動様式(Handlungsweise)から由来し得るということは余り証明されてい さてしかし、理性批判においては、我々の認識における必然的にして普遍妥当的なものがひとえに心情から、そ

理性批判が【150】あらゆるア・プリオリな認識の価値を規定している論証は、つまり以下のようなものである。 たし、決めもしなかった。それゆえに、人間の認識能力の全部の力と無力とを見て取ることをしなかったのである。 であるだけであって、経験的直観に関連してこそ妥当性と意義を持つことが出来るということを提示しもしなかっ なかった。同様に、理性批判は、我々において現前するとされるア・プリオリな表象や判断が単に経験知の諸形式

認識の形式でしかないということである。それらの形式は、私の主観において、あらゆる現実的な印象に先立って 対象に関連して、つまり、この直観と概念とが現実的な対象の認識の形式しか包括していないし、現実的な対象の (A) 唯一の方法で可能なものとして考えられ、表象されるのは、対象の現実性に先立っている直観と概念とが

なくて、経験知の諸形式でしかないし、経験的な直観に適用されてこそ一つの意義を持つのである。 それゆえ、我々のうちで現前しているア・プリオリな直観と概念とが、現実的に経験知の諸形式しか包括してい

先行していて、それによって私は対象から触発される、ということである。

以前より、物自体たるべき規定において、矛盾に陥っていた。 (B)独断的な哲学はこれまでに、物自体を知ることに対するその要求を証明することが出来なかったし、

これら二つの証明の一つ目に関しては、(A)の論証において、またしても次のように推論される。すなわち(a) そこで、人間の認識能力もまた、本性上、そしてその規定からして、物自体を知ることには達し得ないのである。

うな性質で生み出され得ないのだと。それゆえ、(A)の論証においては、我々の表象の客観的な本性の独特なも 何らかのものが【151】我々がその性質を表象することが出来るようなやり方でしか、客観的かつ現実的にそのよ のは、それについて我々が考えるべきものや考えなければならないものに従って規定される。そして(A)の論証

は客観的な存在を、主観的な思索から説明するのである。(b) 非常に良く考えられがちなのは、ア・プリオリに

現実的な対象に関連付けられるというのとはまた別の仕方で、現実的な対象に関連付けられる、ということ

る。誰が自然自体を知っているのか? 自然は人間について、そして人間の認識についてどのような目的をもくろ こで、予定調和の仮説は【152】感官や感覚の道程を通って、人間の外部にある物において性質として現存してい そうした予定調和についての仮説は、何らかの不合理なものもしくは考えられないものを、含んでいなかった。そ 体の性質にも対応して、これを代表するものなのである。ア・プリオリな表象と客観的に現存するものとの間の、 心情がその活動性を通して用いなければならなかったであろうア・プリオリな直観と概念とを通して、何らかのも 実的な対象にいかに関連し得たのかという、そうした可能性を見つけ出したり、また考え出したりすることは、もっ 際して不可欠なア・プリオリな表象と判断とが、単にこうした対象の認識の形式だけを構成するのでないなら、現 うな自然自体の述語を、 えられていたであろうものを、人間におけるア・プリオリな表象が、同時に一緒に含んでいる、という仕組みであ たのであった。すなわち、物自体の客観的な特性が、心情に対して影響を及ぼすことが可能であったとしたら、 るものすべてについて、人間に認識させることを不可能だと見たので、むしろ自然は、次のような仕組みに直面 のが表象されたであろう。その何らかのものとは、単に我々の認識様式における主観的な妥当性のみならず、 定調和しているお蔭で、こうした性質と関連付けられていることが出来た。そしてこの調和があるので、心情には である。ア・プリオリな表象と概念とは、つまり、我々の認識能力の結果が我々の外部の物件の客観的な性質と予 誰が知っているのか? そして、どのような手段によって自然が、こうした目的を達成するのかを規 誰なのか? 我々はもちろん、少なくとも、我々が自然について何がしかを考えることを妨げたよ 知っておかなければならなかったのだ。しかしながら、何らかのものについて認識するに

的(selbstdenken)な頭脳をして、物自体を認識しようと努力するのを、正当にも妨げることをなし得なかったの そして、こうした力と無力とを規定しようとする理性批判の試みは全面的に失敗したであろう。そして、自己思惟 発見されないだろうし、発見されることはできないのだと、結論付けられることは決してない。そうなら我々は、 我々を用心深く臆病にさせるに違いないであろう。また、こうした錯誤のアヴァンチュールは、我々を、我々が確 に結論付けられるというわけではない。確かに、我々には、思弁の領域での哲学する理性が犯した多くの錯誤は、 なるほど、人間理性はいまだ、どうあってもその本質的な仕組みから、そうしたことがまったくできない、と確実 のであったが、その証明は、厳密に見るならば、第一の証明と同じように何も証明になっていない。つまり、 そして、ア・プリオリな表象がただ経験的な直観に関してのみ妥当性を持つ、ということを明らかにするためのも の理性が【152】あらゆる努力や労力にもかかわらず、今日に到るまで何もやってきていないというからといって、 人間の認識能力の本性的な力と無力とに関して、まさになおも、古代からの不確実性のなかにいたのかもしれない。 したに違いなかろう。しかし、この領域が今日に到るまで決して発見されていないからといって、確実に、決して かな指導者を持つことのないままでは、物自体の計り知れない領域へと敢えて立ち入ろうとはしないほどに、賢く 理性批判において提起された第二の証明は、人間の認識能力では物自体を認識することは出来ない、ということ、

心情から、そして心情のア・プリオリに規定された行動様式に由来するという命題である。理性批判は、カテゴリー の適用可能性についてそれ独自の根本命題と矛盾する因果性の原理を用いることによって、これを証明している しかしながら結局のところ、理性批判は次のような命題をも証明している。すなわち、必然的で総合的

エーネジデムス

総合的な判断が我々の認識において引き起こされているとされるところの、心情もしくは我々の表象の主観が本 うした異論にあって一切は次の点にかかっている。すなわち我々は、理性批判に従うなら、それによって必然的で あるいは、その独自の原理に従っても、【154】全く証明していないかのどちらかである。批判哲学に対するこ 何であるか、 我々が研究するということ、そしてどの程度、理性批判において心情もしくは主観について、そ

れが判断の根拠を包括していると語られているのかを我々が研究すること、こうしたことにかかっているのであ

心情ということで理解されるべきは、物自体であるのか、あるいは可想体もしくは超越論的理念であるのかのいず れかである しかしながら、心情が批判哲学によれば、我々の認識における必然的なものの起源を決めているとされる限りで、

る。

なっているまた別のものの実在的な現存在を前提としていて、そして前者は、前提されている後者によって、これ にとって帰せられるとされたのなら、こうしたことは確かに、〈何らかのものの実在的な現存在が、前者の根拠と 立的に理解されて、あるいは実在的に客観的には、我々の認識におけるある一定の部分を引き起こす述語が、 象だとされたなら、即自的にかつそれだけで理解され、我々がそれをどのように表象するかということとからは独 ない。それゆえ、批判主義体系の多くの追従者たちが【155】表象の主体ということで、実在していて客観的に現 が実在的に実存しているものも決めている限りで、把握されている〉という通常の思考様式に適っていたかもしれ 理性批判によれば心情は、一つの物自体として、必然的な総合判断の起源であり、 必然的な総合判断に属する表

実的なものを理解するというようなことになったのであろう。そうしたものに彼らは、我々の内なる必然的な表象

や判断の現存在を顧慮して、原因という認識可能な述語を与えたのである。しかしながら、物自体についてこのよ

とを持つべきだというのなら、ただ、経験的直観にのみ適用されることが許されるのである。さてしかし、我々は らの原理と結論のもっとも重要なものによれば、つまり原因と現実性のカテゴリーは、それらの適用が意味と意義 う。そして、批判哲学によれば人間にとって全く可能ではないとされる認識を前提することになったであろう。 原因を探求する際に、理性の怠惰を助長しているのである。それゆえ、我々の内なる必然的で総合的な命題の現存 をすることによって補おうとしたのであって、それによって、必然的で総合的な判断の現存在について把握できる だから、明らかに、必然的で総合的な判断の現存在について自然学的に説明する根拠の欠如を、 ら導出せんとした時に、その固有の根本命題に忠実ではなかったことになったであろう。『純粋理性批判』はそれ して説明したのであった。それゆえ、理性批判は、我々の内なる必然的で総合的な判断を、 出すこと、こうしたことのために前提された神的な創始者を引き合いに出すことよりも、まだ堪えられるものだと ただ自然学的である限りの、こうした秩序と合目的性についての最も野蛮な仮説を、超越論的な事物を引き合いに 意思に基づいて自然における秩序と合目的性についての説明を、役に立たないものとして斥けた。そして自らは、 体を引き合いに出したなら、この現存在を説明する際の一切の悟性の使用を無化したことであろうし、理性の怠惰 とがあってはならない。その上、我々のうちで必然的で総合的な判断が現存在することを分からせるために、 判哲学自身の主張によれば、主体には、認識可能で実在的な現実性も、認識可能で実在的な因果性も付与されるこ 的に知覚するだけなので、そうした表象の主体は、我々にとって認識可能な対象の領域に属すことはできない、 うにして必然的で総合的な判断を導き出すならば、明らかに、批判哲学の精神全体に矛盾することになったであろ (Faulheit)を助長したことであろう。【156】同じような根拠から、『純粋理性批判』は、神の現存在並びに神の わゆる表象の主体を直観することができずに、ただ、批判哲学自身も認めているように、内的感官の変化を直接 物自体としての心情か 超自然学的な説明 物自

果という概念ということで、知覚を包摂する必然性を洞察することが出来るだけなので、我々の認識における必然 だろう。しかし、表象と内的な変化の全系列が、我々の現世の生活の間、全系列がこれに即して実在するところの 的で総合的な命題と、先行する認識との結合を、我々が把握することが出来ず、また、前者に即して現出する諸規 が一般的にも、理性批判の主張に従っても、ある事物の現存在が、これによって必然的に措定される何か別のもの 理解することの出来ない心情が、必然的で総合的な判断の原因とされ得るのか、ということである。そして、我々 的な命題がいかにして生成して現存在することが出来るのか、正しく把握することが出来ない。しかしまさしく、 るよりもはるかに適切なことだったのであろう。確かに我々は、このようなやり方では、我々の内に必然的で総合 の先行する系列の方も、他方からという具合にいつもそうなのだが、導出されているからである。その際に私の表 の主体に即して現存するとされる表象の全系列は、【158】一切のその諸規定とともに、 先行する命題や表象から導出することの合理性に反するものは、なんら証明されなかったであろう。 主体自体の前提を要求すると言おうとしたなら、これによっても、我々のうちに現出する必然的で総合的な判断を、 な原理に基づいている限り、唯一の許容し得る導出であったであろうし、哲学の精神に唯一かなったものであった ることなど出来ない。むしろ、この導出は、一切の経験がこれに則って説明されなくてはならないところの経験的 の現存在へと、どのようにして関連付けられるのか、どんなにしても理解することが出来ないし、ただ、原因と結 つぎのこともまた、全く分からないのである。すなわち、【157】どうして、我々がその客観的な性質に鑑みて何も 後者から導出することが出来ない、という無能力のゆえに、そうした導出に対して根拠のある反論を表明す 別の先行する系列から、 なぜなら、

判哲学の精神にとって、こうした現存在の原因を、我々がまったく知らないような超越論的な対象において措定す

どんな場合でもそれ以前に既に我々のうちで存在していた判断や表象の性質から導出しようとするなら、

然的な存在者を引き合いに出して、自然の秩序や合目的性を説明することも出来ないし、そうした存在者を引き合 我々が何も理解していないところの主体の行為様式から説明しようとすることであっただろう。同じように、 種の独自性(Eigentümlichkeit)を、超越論的な本質から、あるいは我々の表象の超自然的な主体から、さらには て悟性の使用を破壊するものである、。同じように非哲学的で、理性の怠惰を助長するものは、 説明するのではなく、超越論的な創始者を引き合いに出すことによって説明することは、このように非哲学的にし 出されているのである。そこで一言で言うなら、自然における秩序と合目的性を自然の根拠から自然法則に従って 象に即して現出する何らかのものを、主体それ自身から導出する必要など少しもないのに、経験の原理に則って導 いに出して、我々の内なる判断の現存在や規定を説明することも出来ないのである。(*) 我々の認識のある

*) それはそうとして、我々の認識における必然的なものを、物自体としての心情からこうやって導出する 理性批判』における最も優れた章の一つであって、そこでのどの行文にも哲学的精神が息づいている)通 盾することを知るためには、『純粋理性批判』で純粋理性の誤謬推理について取り扱っていた章を(『純粋 のことである。しかしながらここからは、カントが、批判主義の体系を唯一真なる哲学体系だとみなす人々 て理性批判においては人間には全く認められていなかった心について知っていることを、僭称した限りで たちが、主観それ自体を、繰り返し我々の表象の形式の原因だと称していた限りでのみ、そしてそれによっ ら立てたというような意見を抱いて検証したのではなかった。むしろ、カントの体系の非常に多くの友人 り一遍でいいから一読しさえすればいい。しかし私は、この導出を、あたかもカントがこうした説明を自 表象する主体の我々の認識について与えていた説明と矛盾する。そして、その説明が批判主義の体系と矛 極めて判明かつ極めて規定された【158】説明、すなわち、カントが『純粋理性批判』のなかで、

によってさえも、理解されていなかったか、ということが分かる。彼らは、この体系の敵対者たちすべて に対して、絶えず、次のように言い聞かせていたのだ、すなわち、 批判主義の体系を正しく理解すること

と、それを唯一真にして論争の余地のない確実な哲学だとみなすことは同一だ、と。

結論の信頼性がかかっているところの心情から導出することなど、本来的には形式から言えば、何ら真理性を包括 たない。そうであるなら、我々の認識における必然的なものを、その正当性と真理性とに批判哲学の極めて重要な 与えられた対象だけを規定することが出来るのであって、純然たる考えられた対象へ適用されても、何ら意味を持 リーを適用することになったであろう。だが、理性批判によれば、すべてのカテゴリーは本来、ただ感性によって 何らかのものであるかどうか、全然知ることが出来ない、と主張する、理性批判は、そうしたものへ原因のカテゴ な対象として)我々の認識における必然的なものの原因であるとされるのなら、理性批判は、空疎な虚構を、 であるという命題から結論付けられたすべてのものにも、その本来の学説に従うなら、確実性と真理性とが欠けて していない考えられたものでしかない。そうであるなら、理性批判において、心情が必然的で総合的な判断の根拠 のみならず、全く知られていないのだと。その結果、我々はそうした虚構について、果たしてそれが、少なくとも している。すなわち、我々にはただ、【200】我々にとって現実的なものを洞察するためには、それが不必要である の認識の構成要素の起源へと高めることにあったであろう。この虚構については、理性批判自身が次のように主張 いると見なければならなかったであろう。(*) て別の何かが欠けているなかで、それに経験知を結びつけるために、悟性がそれを用いるところの純然たる叡知的 心情が可想体(Noumenon)として(ただ、悟性によってのみ表象され得る純然たる叡知的な対象として、 我々

(*) ここで私は可想体という言葉を、理性の理念からは区別され得るという、『純粋理性批判』における極 解しているのだ。こうしたことに対してカント氏自身は、可想体という言葉を二・三回、(『プロレゴメナ』 れるに値する。なぜなら、そのことが明かしているのは、批判哲学の前提と結論とを正しく理解しておか たがゆえに、そうなるきっかけを与えていたのである。【161】だがしかし、このことは、もう一度注目さ の一〇一頁、一〇六頁、そして『純粋理性批判』四二三頁の注で)かつてのスコラ哲学の意味で用いてき めて普通の意味で理解してきた。しかし、批判哲学の多くの友人たちは、可想体ということで物自体を理

なかったなら、人は批判哲学の徒になりかねないからである。

きるために必要なのは、我々がまず第一に『純粋理性批判』が、超越論的理念の本性、起源そして規定について説 張に従うなら、確実性と実在的な真理性とは全面的に拒否されなければならない。こうした帰結の正当性を実証で 理念の規定と我々の認識の限界について理性批判が説いた最も重要なものや理性批判自身の原理、さらにはその主 るなら、我々の認識における必然的で総合的な命題の起源について、理性批判が与えている説明には少なからず、 が付与されるべきであったなら、そしてその限りでのみ、心情に『純粋理性批判』がこうした根拠を与えるのであ 、ていたことについて簡単に触れることである。 しかし、ただ、超越論的理念としての心情(表象の主観)にとっては、我々の認識における必然的なものの根拠

借用されていない悟性からも概念と根本命題とを生み出すというわけである。 しているように)論理的な使用のみならず、実在的な使用もある。これによると、理性自身が、【162】感官からも (推論したり、特殊なものを普遍的なものから認識したりする能力)については、(『純粋理性批判』 が主張

悟性の認識が、なし得る最高の統一にして絶対的な完全性を受

しかし、理性のこの論理的なやり方は、我々に、理性の実在的な使用について、そしてその際に、次のような命 無制約なものを見いだすことに向かって努力する。

け取るために、悟性の制約された従属的な認識に、

さて、理性の論理的な使用においては、理性は、

題のうちに含まれていて根拠となっている原理についての確かな情報をも与えてくれる。すなわち、 与えられていて、客観的に現前している、という命題である。 のが与えられているなら、相互に従属しあう制約の全系列も、その系列それ自身は制約されていないのであるが、 制約されたも

題から全面的に区別されるのである。 命題にとって妥当な経験的使用はなされ得ない。この経験的な使用によって、この命題は、悟性のあらゆる根本命 この命題は必然的で総合的な命題であって、それゆえア・プリオリな命題であって、これについては、そのうえ、

るために、【163】超越論的理念と呼ばれなくてはならない。 適用されるなら、特殊なア・プリオリな概念の起源を包括しているが、これは、 ように、理性推論の形式(間接的な推論の形式)は、これが直観の総合的な統一へ、カテゴリーの標準化に従って しかし、判断の形式は、直観の総合的な統一の概念へと転化されるなら、純粋な悟性概念であることを露呈する カテゴリーから厳密に区別され得

この最高の理性概念のもとにあるさまざまな理念を見つけ出そうとするためには、ただ、理性推論のさまざまな こうした理念の最高のものが絶対的に無制約なものの概念である。

従って、差し当たりは最高の理性概念のもとに存している三つの理念がある。つまり、(a)絶対的で完全な主観 形式を考慮に入れさえすればよい。なぜなら、これらの形式のいずれにも、特殊な理念が対応しているからである。

の理念であって、これは二度と別のものの述語にはならない。(b)現象の制約の系列の絶対的統一の理念。(c)

思惟そのもののあらゆる対象の制約の絶対的統一の理念、である。

性がまったく知らない最高の統一と完全性を、理性の欲求に従ってもたらし得るために、規定されてもいるのであ 認識に即した特殊な【164】統一の形式である。それだから理性の理念は決してまずもって経験の対象とはならな 経験的な対象の思惟の特殊な形式であるように、まさに、理性の理念はこの能力の本性によって規定された、 的な知覚へと適用することによって、既に獲得された知識の統一へと関連付けられる。それゆえ、カテゴリーが、 覚へ適用されないなら、実在的な洞察を供し得ないように、理性はそのすべての原理や理念とともに、悟性を感性 い。だが理性の理念は、感性と悟性によって獲得された経験知を把握できるために、そして、経験知において、悟 しかし、悟性がその概念や根本命題ともに、純然たる感性的な知覚の統一へと関連付けられるように、しかも感

そしてこの完全性は諸原理の完全性によって達成される。理性の理念の使用はそれゆえ、ただ規整的でしかなく、 ごとく、理性の本質によれば、我々の経験知のうちに無制約な統一と完全性とを持ち込むことに規定されている。 理性の理念も根本命題も、何らかの超越論的な対象についての認識を我々に供してはくれない。そして、理念を介 我々の経験知が理性にとって完全であるために必要な統一にのみ関連する。 して経験の外部の対象を認識しようというのは理性の意図では決してない。むしろ、理性の理念や根本命題はこと しかし、 超越論的な対象が、我々の表象の外部で、何らかのものであるはずである限り、まさしくそれゆえに、 る。

常に、感覚界の領域を超えて我々の認識を拡張して、物自体を我々に知らせるようなものだと見なしてきた。 とえに理性そのものの批判によってしか除去され得ないような誤解によって、【165】純粋理性の根本命題や理念は だが、純粋理性の根本命題や理念にとって、人間の表象の外部での客観的妥当性の仮象が付きまとう。 そしてひ

とされたのはどうしてか、ということは把握され得なかったのである。それゆえここに、単に我々の認識の仕組み

理念は客観的に現存する対象の認識として考えられたわけで、理念が悟性認識の完全性のために役立つはずだ

のは、 する際にも、果たしてそしてどの程度、生起しているのか、ということである。 の基礎付けにあっても、そして特に批判哲学において現われるような必然的で総合的な判断を表象の主観から導出 に属しているものが、物自体の客観的な本性に属しているものと混同されたのであって、こうした混同のおかげで、 合理的な心理学や超越論的な宇宙論そして神学という妄想が、その起源と重要さを得たのである。 我々の認識における必然的なものの起源とされる限りでの心情ということで、批判哲学に従って超越論的理念を さて、我々の以上のような判断を確証するために、問題になるのは次のことである。すなわち、我々が研究する 理性批判自身が理念の誤用について、そしてこの誤用に由来する幻影について語っていることが、批判哲学

作の読者の自由に委ねている。純粋理性の誤謬推理について取り扱っている『純粋理性批判』の章も、それについ らかにしていない。そして、むしろ心情ということで、物自体や可想体、あるいは理念を理解することを、彼の著 実な構成要素の起源として考えられるべきだとされるこの心情が、本来何であるかについては、 情から由来するものとして表象している理性批判のすべての箇所において、カントによれば我々の認識における確 私の知る限りではどこにもない。『純粋理性批判』の序論、超越論的感性論、そしてカントが表象や根本命題を心 由来しているとされる主観ということで、何を考えるべきかについて、はっきりと明確に説明しているところは、 になる。なるほど、【166】カント氏は、『純粋理性批判』において、そこから我々の認識における必然的なものが 理解しなければならないということは、しかし、この哲学の洞察力ある弁護者のきわめて判明な言表から、 てのいかなる解明ももたらしてはいない。そしてもちろん『純粋理性批判』の著者が、〈心情〉もしくは〈表象す カントは決して明 明らか

ラインホルト氏が、全く素晴らしくはっきりと判明に、『表象能力の新理論』(とりわけ五三○頁以下で) 説明して 判断の、考え得る因果性の述語を認めたのだと、結論付けなければならない。しかしながらこの論件については、 応しい洞察を獲得することが出来るところの唯一の能力にとしては、実践理性が指示されて、そして思弁的理性に 問いである。【167】この上、この章では、それによって、我々の理性の主観の本性について我々の本当の欲求に相 我々の認識における或る構成要素の起源を実際に構成すると、どこから知り、見通すことが出来るのか?」という であった。すなわち、我々の思想の主観が我々にまったく知られていない場合に、一体我々は、どこから、 理性批判』を通読すれば、自然な仕方で問いが投げかけられると言うことは、カントにとって思いもよらないこと についてはっきりと表現するきっかけにはもちろんなったであろうに。そしてこの章の執筆にあたっては、『純粋 越論的な理念だけが理解されていることを望んでいた。そしてその限りで主観に、我々の内なる必然的で総合的な 始者は表象の主観ということで、これが我々の認識における必然的なものの起源であるとされる限りで、単に、超 れていなかった。『純粋理性批判』やとりわけ『プロレゴメナ』(四六節)の何箇所からは、しかし、批判哲学の創 は徹底して、実際には何が表象の主観であるはずで何がそうではないのかについて、決定する能力が少しも認めら る自我〉が我々の認識における必然的なものの根拠にして起源だとみなされるのはどのようにしてか、ということ いた。この説明によれば、表象する主観には、ただ、我々の認識における必然的にして形式的なものの根拠である.

されたのは正しい。(a) この説明によって我々には、理性批判が一切の経験を超え出た洞察を供していた。 根拠になっていたような、そうした必然的で総合的な命題の起源にして可能性の説明について、以下のように主張 それゆえ、【168】『純粋理性批判』が与えた、そして『純粋理性批判』において樹立された哲学の新たな体系の 考え得る述語がただ理念としてのみ認めることが出来るし、許される、というのである。

念の客体へと適用されることになるのは、それは、この適用によってしか、経験に属していることが明らかなもの 能性と原因を規定することへと下ってゆく。【169】(d) その説明において、結局は悟性のカテゴリーが理性の理 化の絶対的な主観へと成し遂げられる。しかし、この絶対的な主観からもすぐに再び、経験に属しているものの可 る。(c)その説明において、経験において現われるような、そうした何かから、悟性は無媒介的に内的感官の変 めることが出来るからであり、また、そうした理性にそれにとって妥当する刻印を刻むことが出来るからなのであ である。なぜなら、理性は超越論的理念を用いて、悟性によって加工された経験知を絶対的な統一や完全性へと高 験によって確証されたり論駁されたりもする。しかし、そうした超越論的な理念は、理性の意図においては不可欠 は、悟性を使用するに当たって、経験の観点では本来は何の役にも立たないし、超越論的理念の助けを借りて、 のものの(必然的で総合的な判断の)現存在や規定を理解できるようにする。そうした超越論的な理念は、我々に 論できたりするだけである。(b)そうした説明においては、超越論的理念の助けを借りて、経験に属する何らか 表象が生成して現存している、ということだけを経験するからである。表象の起源の様式は、ただ、考えたり、

理性批判】によるとそうした説明そのものにどのような価値が帰せられるかについても疑いを差し挟む余地はな 識の本来の限界についても、真の洞察がいかに多く、獲得されているかについては疑いようがない。また、

『純粋理性批判』が、合理的心理学や宇宙論そして神学の学説の真理性に対抗して、さらに、独断論

つまり、

説明している独自なものを解明するに、この説明によって、先の命題の本来の生成様式についても、また我々の認

純粋理性批判』が哲学の新たな体系をその上に構築したところの、必然的で総合的な命題の起源をこのように

の可能性を考えることができないからである。

なら、どのようにして、どのようなやり方で、表象が我々のうちに生じるのかを、我々は決して経験せずに、常に、

象について、その可能な経験に属する以上のことを認識しようと望むこと、あるいは、我々が、経験の対象を構成 性批判が人間の認識能力について行なおうとしていた最も入念な研究に従って一般的に理解されるなら、我々が対 まな構成要素の成立も、心情やその行為【171】様式も、経験の対象ではない。そしていずれも、ただ唯一の経験 する我々の表象のある部分の真の起源についての洞察の信頼性に対抗している(*)。【170】なぜなら第一に、 における必然的なものを心情から導出することに対抗して、こうした導出の根拠に対抗して、さらにそこから生成 がこれまで供給してきたような、こうした学説の証明の正当性に対抗して、反論したすべてのものは、我々の認識 の起源をそこから説明するために適用することは、理性概念の誤用である。これに加えて、この説明もまた、 てはくれないのである。それゆえ、理性批判によると、絶対的な主観の理念を、 の規定を誤認していない限り、経験に属さずに実際には現前しているとは言えないもののいかなる認識をも供給し れた経験知を、 ついての真の行為様式をいつか洞察しようとすること、実際の認識に寄与するものをいつか洞察しようとするこ 洞察しようとすること、特に我々の認識の起源を心情に基づいていつか洞察しようとすること、あるいは、心情に 的直観において、我々に与えられているのではない。そこで理性批判によっても、我々の認識固有の起源をいつか しないものの認識を要求すること、それは全面的に不合理とされるべきである。さてしかし、人間の認識のさまざ は全面的に不合理である。第二に、すべての超越論的理念は、理性批判によれば、ただ、悟性によって加工さ 自らの概念を一切の経験の外部の対象へと、適用することについて何も知っていないのである。そこで、 単に悟性に委ねられなければならないのであるが、しかし、その悟性は、自分自身の規定に従うな 最大の完全性へとできるだけ近づけることに役立つだけである。そして超越論的理念は、我々がそ 我々の認識における必然的なもの

した観点からしても、

悟性認識に絶対的な完全性を与えるためにのみ、本来的には用いることが許されたものを

45

うな洞察の真理性にも対抗している。こうした説明は、【173】『純粋理性批判』で樹てられているような、すべて この必然的なものの本来の実在的な根拠を発見したと信じているとしても、理性批判に従うなら、これも、悟性の 認識における必然的なものの根拠がただ、心情のうちに含まれているものとして考えられるということによって、 客観的で現実的な存在を達成したと妄想したとしても、そしてこの存在についての性状を、思索に帰される諸規定 の証明や基礎付けと一緒であって、批判哲学によると悟性や理性の概念の唯一本当の規定を正しく知っていたな 束した洞察の実在性に対抗するものは、また、表象の主観性から必然的で総合的な命題の起源の説明を約束するよ 自己認識の欠如に起因するような欺瞞でしかない。従って一言で言うと、合理的心理学や宇宙論、そして神学が約 から思索へと着せしまると結論付けたとしてしても、それは単なる欺瞞でしかないはずである。それゆえ、我々の 理性の理念の誤用である(**)。結局のところ、第三に、理性批判によれば、悟性がその思索によって、

(*)これについて簡単に確信するためには、【170】ただ、確実な表象のア・プリオリな起源のために理性批 ようになる。ただ主観としてのみ実存していると考えられ得るものは、また主観としてのみ実在する。我々 を、その完全な姿で獲得するであろう。我々の思惟する自我の真なる主観性のための証明は、例えば次の 要概念と取り違えしさえすればいい。それによって、つまりそれらの学問がその上で構築されてきた証明 判でなされている証明に現われてくる主要概念を、合理的心理学や宇宙論そして神学での有名な議論 の主

主観としてのみ存在する。理性批判は、確実な表象の起源をア・プリオリに提示するために次のように推 の思惟する自我を我々は、主観としてのみ実在しているとしか考えることが出来ない。それゆえ、それは 直ちにその仮象が消えてゆく詭弁でしかない。

46

【172】、そこから事実を理解させるために用いて、それによって悟性の使用を廃棄して、限定しようというのなら、

ものである。以下同様、というように。 論する。すなわち、ただア・プリオリに成立したと考えられ得るものだけが、ア・プリオリに成立しても いるのである。我々の認識における必然的なものは、ただ、ア・プリオリに成立したとしか考えられない

(**)我々の認識における必然的なものを表象の主観から導出することは、それ自身、理性の要求には属し とともに、我々の外部の事物から起因するということが確かであろうと、絶対的な主観の理念を欠かすこ ていない。そして我々は、内的感覚の変化を完全に認識するためには、たとえ、表象が、その一切の規定

とができなかったであろう。

たのだ、ということであろう。 を、とりわけ誤謬推理を取り扱っている節を、我々の認識の一部は心に由来するという主張でもって増やすべきだっ すなわち、導出はその一切の特性からして『純粋理性批判』の弁証論の章に属していて『純粋理性批判』はこの章 導出することに対抗して、異議を唱えたとしたら、その第一のものは、少なくとも、こういうことであっただろう。 かを本当のようだと見いだすことができるなら、懐疑論によって提起された問題を非常に不完全にしか知っていな いに違いない。ヒューム自身が、我々の認識における必然的なものを、理性批判が行なっていたように、心情から そしてこうした詭弁によって、ヒュームの懐疑論は根本から覆されて解消されるのであろうか? 実際、人は何

識における必然的なものの起源を、我々の悟性や理性の本性の仕組みに従うなら、どのように考えなければならな いか、ということを提示しようとしただけであって、その際には、【174】こうした起源が客観的に実際どのような 「しかし、こうした異議は、『純粋理性批判』には全く当てはまらない。つまり『純粋理性批判』は、 我々の認

47

から導出することによって約束し、行なっていたのは、何らかの超越論的な物件の認識ではない。すなわち、

性質であるかということは、少しも決めないままなのであった。『純粋理性批判』が必然的で総合的な命題を心情

の真なる洞察へと導いてくれるはずなのか、と。 う何であろうか、と。そしてこの仮象は我々を、我々の認識全体にとってはどのような事情にあるのかということ ように問うてもいいだろう。すなわち、この根拠の帰結は、我々の認識の法則に相応しい対応している仮象とは違 ている規定から、我々の外部の事物と全く何の連関も持たない、そうした単に主観的な根拠であるはずなら、 に出すすべての根拠が、単に主観的な根拠であるはずであって、これは唯一、ひとえに、我々の思考様式の現前し の根拠にもある。そして結局、『純粋理性批判』が必然的で総合的な命題の起源のために心情に基づいて引き合い 実性と信頼性を要求できる。『純粋理性批判』の根拠と十分に同一の事情が、超越論的心理学や宇宙論そして神学

識の構成要素が、因果性の法則に適った形でそれ自体、実際には何らかのものと結ばれているということが既に決 問うことが出来るためには、一つには、因果性が現実的なものの客観的な述語であること、もう一つには我々の認 体に帰属するものや我々の表象の外部に現前するものは何も意味することがなく、我々の認識の構成要素の現実的 主観的であって、経験における我々の表象の連関に唯一適合する原理〉だと説明されるやいなや、 因を問うてはならない。 められていて、確実でなければならない。しかしながら因果性が、我々の表象や思考様式に属する何ものかでしか な根拠について、全く何も言われ得ないし、それについての一切の研究は無意味になる、ということである。 我々の洞察のこれやあれやの構成要素の、本来的な実在根拠や原因はどれか、ということを、 【176】しかしこの際、一般的に次のことが考慮されなければならない。充足理由という実在的な原 々の認識とは違う何らかのものに基づいて、我々の認識の現実的な起源を、そしてそれの本当の原 『純粋理性批判』で提起されていた因果性の原理の規定は、それゆえに、 我々の知識 徹底的に、 理性的な仕方で (単に の本

当の起源や本来の生成様式について、すべての哲学を破壊して、こうした起源についての一切の主張や、【177】こ

49

規定に従って考える場合、果たして何らかのものが我々の表象の根拠にして原因として、実際に現存するのか、 うした主張から導出されるすべてのものを、空虚な幻想だと説明することになる。なぜなら、因果性の原理のかの の諸規定に従うなら、悟性は、さまざまな表象を、それらを経験 (Erfahrung) として読むことが出来るためには、 いうことは、全く問われ得ないからである。むしろ問われるのはただ、予め悟性のうちに現前していたその活動性

我々の認識における必然的なものが心情から実際に由来して発生するなどと、どうして言うことができるのかとい 最大の躓きの石でもあった。彼らには、原因と結果の概念が我々の表象の結合の単なる様相であるとされる時には、 単に主観的な悟性の原理としての因果性の原理の規定は、批判哲学のすべての敵対者たちにとっての、まさしく

いかにして相互に結び付けなければならないのか、ということだけである。

とは、本来、次のようなことに他ならないからである。すなわち、我々における必然的で総合的な判断を我々は、 テゴリーや理性の理念の本質についての『純粋理性批判』の独自の説明によれば、その主要な命題が語っているこ うことは、分からないままであった。そして彼らは、我々における必然的で総合的な判断は、我々の表象する主観 悟性の主観的な格律のゆえに、悟性を(能力を)使用する形式の所産だとみなさなければならないのであって、 の能力の所産である、という批判哲学の主要な命題に、何の意味をも見いだすことができなかった。なぜなら、

分に立証してきたと私は思う。ところが私は批判哲学の最高の根拠をこうやって検証するにあたり、ヒュームの懐 必然的なものを心情から導出することによって、十分に反駁されていたかどうかという問題を決めるには、既に十 【178】こうした形式は徴標としては、理性を使用する形式に(表象の主観に)帰せられる、ということである。 だがしかし、ヒュームの懐疑論が、果たして『純粋理性批判』において提起されたような、我々の認識における

疑論との論争に際して、そして批判哲学自身の体系の基礎付けのために、批判哲学にとって役立ち得たものを見過

でいた前の時代の独断的な体系の多くを理性批判自身が揺さぶったように、懐疑論によって、きっと十分に揺さぶ 理性批判は徹底的に持続的な有効性を要求できるようなものではありえず、むしろ、懐疑論によって、遅かれ早か ものではない。そして、理性批判によるこの勝利が、勝ち取られていなかったということになったなら、 当にも、それゆえ大風呂敷のやり方でヒュームの懐疑論に対する勝者だと自慢しているという非難は、 獲得されたであろうにと、 について自分の著作で配慮していた人など、一人たりとも知らない。しかしながら、批判哲学を弁護するにあたり、 を解消し、論駁してくれたなら良かったのに! 今までのところ私は、批判哲学の友人たちの間で、そうしたこと の諸根拠もますます納得のゆく重要なものになってきた。だが、批判哲学の友人たちが、批判哲学への疑いの根拠 けられたのであった。そしてむしろ、理性批判の結論の前提条件についって熟考すればするほど、私には先の疑い なものであるように私には考えられた時、先に述べたような、【179】この証明が真実であることへの疑いを突きつ 判』の指導と教えによって最終的にはきっと物自体を知ることができるのかできないのかということについて確信 は長い時間をかけて、『純粋理性批判』学び知った後で、大いなる希望を育んだのであった。つまり、『純粋理性批 における欠陥を剔抉しようとする意図を抱きながら頁を繰っていた、というところにあるのではない。 ヒュームの要求にとりわけ顧慮していたなら、理性批判という、きっと不滅であろう傑作のための実のある功績が した期待の実現を待ち受けていた時、そして『純粋理性批判』によって供された体系の最高の証明がきわめて簡単 して、私たちの洞察の実在性の本当の限界について教授される、という期待である。しかしながら、私が既にこう ごしてきたという意識はない。批判体系の最高の根拠の正当性に対する私の疑いの所以は、私が『純粋理性批判』 結局そのあらゆる名声を奪われることになったであろうし、その体系の創始者が、永遠に構築したと思い込ん 私は思う。なぜなら、理性批判をめぐる諸問題が今やそうであるように、理性批判は不 むしろ、私 根拠のない もちろん

51

られることになったであろう。因果性の概念や法則を用いることに対するヒュームの攻撃は、このほかにも実際に、

【180】最近の状況からすれば哲学にもたらされ得た最も深い傷である。なぜなら、ロックやライプニッツの時代

学を実現しようとすることなど、考えてはいけないのである。 連関していることを提示するかして、埋め合わせるまでは、人間の認識の成立様式について、人間の認識の構成要 何ごとかを語ったり、決定したりして、それによって恣意的な私念の織り成すものよりも多くを構成するような哲 素の実在性について、そして、我々の表象の外部に現存したり、現存するはずのないような何らかのものについて、 合わせられない前に、普遍妥当的で論争の余地のない命題によって、因果性の原則や概念の妥当性が、我々の表象 ためのヒュームの攻撃によって素材が一切合切、奪われてしまっているからである。そこで、こうした喪失が埋め 以来、あらゆる哲学は表象の起源についての研究によって基礎付けられてきたので、我々には本来、哲学の体系の の成立にまで及んでいることを実証するか、あるいは、別の原理から、私たちの表象が表象外部の何らかのものと

解題《

ラインホルト哲学からフィヒテの知識学が成立するきっかけとなったことは周知の通りである。また、マイモンの 『新論理学試論』の付録とともに、ラインホルトの『哲学者たちの従来の誤解を正すための寄与(第一巻)』(一七 G・E・シュルツェが、一九七二年の初夏に匿名で刊行した『エーネジデムス』は、初期ドイツ観念論にあって、

た「エーネジデムス」の部分訳に引き続き、「ヒュームの懐疑論は理性批判によって実際に論駁されたか?」と題 を徹底的に論難している。本稿は、二〇〇七年三月に刊行された『世界の視点――知のトポス』の第二号に掲載し 九○年)に収められていた「根元哲学の主要契機の新叙述」を再録しながら、ラインホルトによる哲学の基礎付け

的な意識によって彩られていることを、見逃すわけにはゆかない。 とで、懐疑論者、エーネジデムスの真骨頂が示されているとともに、その論述は常に、ラインホルトに対する批判 された一章を訳出した。『純粋理性批判』は、ヒュームの懐疑論に対して有効な反論たり得ていないと論難するこ

がらの訳業であったことを告白する。 した。ラインホルトを引き合いに出して論難する箇所とは一転して、ドイツ語は晦渋を極め、共訳者に助けられな in the Development of Post-Kantian Idealism. < (State University of New York Press) 1985 については、適宜参照 ムス』の頁付けである。また、英訳、G. E. Schulze : Aenesidemus. (excerpt) in : 》Between Kant and Hegel. Texts 底本には、アエタス・カンティアナを用いた。【 】のなかの数字は、アエタス・カンティアナ版の『エーネジデ

どは、次号の『知のトポス』に掲載することを約して、稿を閉じたい。 本章のひとつ前の「理性批判による、因果性の概念と因果律との使用の限界について」と題された短い章の翻訳な 原版一八一頁以降は、再び、ラインホルトのテクストを再掲しながらの論述になる。その部分の翻訳、 さらには

栗原 隆)